

時代と思想の狭間で—近代の思想的営みに現代の系譜と意味を問う—

ドイツ思想史と歴史理論の探究をめざす研究会

かん だ じゅん し
神田順司
文学部教授

ポスト・モダンなどという流行思想にもかかわらず、われわれは今なお近代の延長線上にいる。ヨーロッパ近代はその激動の歴史の中で、自由主義、ナショナリズム、社会主義など様々な思想を生んだ。それらは変容を遂げながら、なおもわれわれの社会や政治の在り方を、そして思考や行動を規定している。そのような近代の思想潮流をその生成の歴史に照らして理解するのが西欧近代思想史という学問である。

西欧近代思想史の中でも、特にドイツの思想史を中心とする本研究会では、これまでフランス革命期のドイツの政治思想、ユダヤ人問題、初期社会主義などのテーマを取り上げ、それらを同時代の社会や政治との関係において考察してきた。そうした主題の考察を経て、ここ数年はマルクスの思想を扱っている。

かつてマルクス主義は歴史を動かす思想であった。それはわが国

においても政治や労働運動そして学生運動などに強い影響力を及ぼした。そのマルクス主義が、社会主義の崩壊以降急速に衰退し、忘れ去られようとしている。マルクス主義を国是とするソ連や東独などの社会主義体制は何故挫折したのか。その権威主義的強権支配はマルクス主義からの逸脱なのか、それともマルクス思想の現実の姿だったのか。他方、競争の激化と弱者切り捨てによって延命を図る新自由主義もその限界を露呈している。われわれは未来に向けてどのような対抗軸を形成しうるのか。こうした問題意識から本研究会では「マルクス主義とは何であったか」を問うている。

マルクスの思想を歴史の中に位置づけるこのような思想史研究の具体例を通して、学生諸君には理論的能力と歴史的発想を身につけて頂きたいと思っている。学生数は14名、研究会の共通テーマに取り組みつつ、それぞれが卒論作成に向けて独自の個別テーマを追っている。

過去を訪ね、現在のこれからを問う

たにふじ まい こ
谷藤麻衣子 文学部4年

マルクス思想をはじめとするドイツの思想史に関する英文講読を軸としながらも、現代社会の諸問題についても考察や研究を行っています。例えば夏合宿では日米安保条約や日本の戦争責任などをテーマに学生同士が議論を交わします。卒業論文では、神田先生の研究分野である思想史やドイツ史はもちろん、アメリカ史や日本の近現代史を取り上げる学生もいます。一見多岐にわたるゼミのようですが、歴史学の意味と重要性を再確認し、そのうえで特定の地域や時代を絞ることによって社会全体の構造を掴むことができます。これらの研究の重なり合いから、今ある社会の問題に対しての一つの視座を得ることができるゼミだと感じています。



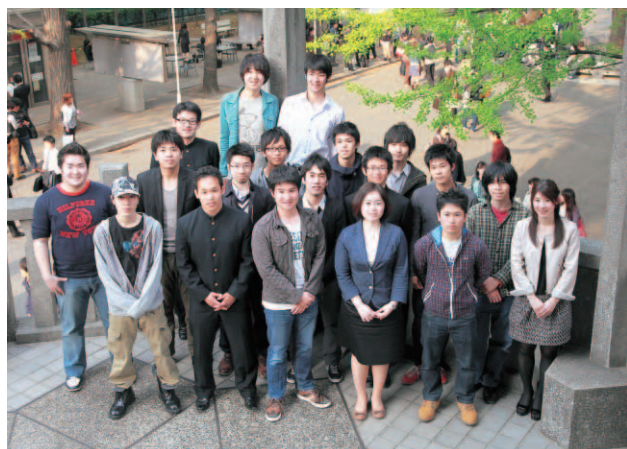
ゼミは小さなインド・ワールド

インドを中心とする南アジア経済史を学ぶゼミ。
2011年度は、3年生13名、4年生6名が在籍しています。まだ4期目の新しいゼミです。

神田ゼミの日々

たけだ よしまさ
武田吉正 経済学部4年

私たちのゼミは、インド経済史をベースに現在のインド経済について学んでいます。インドにはビジネスの面だけではなく、貧困、哲学、宗教、行き過ぎた民主主義の問題等、今後の世界を議論するのに最高の題材がそろっています。そしてその全てが関わってくる経済学は非常に複雑ですが、エキサイティングな学問です。昨年の三田祭論文では、インドの電気という財を観察し、インド経済が抱える問題点を考察し、その解決策をまとめました。できて4年目のゼミなので、自分たちの思った通りにゼミをデザインできますし、しなければなりません。先生とゼミ生でわいわいディスカッションしながら、いかに良いゼミにできるか試行錯誤を繰り返しています。



かんだ
神田さやこ
経済学部准教授

教員も新米ならゼミ生も新米で、自分たちのゼミの形を模索しているうちにあつという間に3年が過ぎました。「○○学を学びたい」、

「○○ゼミの伝統に憧れて」、「○○ゼミの雰囲気が好き」といった理由で当ゼミを選ぶ学生はほとんどいません。毎年、私も含め皆が皆バラバラの方向を向いている状態からのスタートです。個だけが際立つ多様なスパイスの集まりとでもいいでしょうか。

ゼミでは、私の専門である経済史だけではなくゼミ生の関心を考慮してインドに関する幅広い問題を扱います。3年生は、「調べる」、「読む」、「書く」、「発表する」、「議論する」といった基本的なことを学びます。今年は、ゼミ生が各自のテーマ州の経済、政治、文化等について徹底的に調べ、ゼミ版のガイドブックを作ろうというプロジェクトが進行中です。それが終わると、3年生最大のイベントである三田祭論文の「テーマ選び」

に取り組みます。これが実はとても難しいのです。学生は驚くほど多くの引き出しを持っているので、このテーマ選びを通じて、それを自分で開けて取り出す力を伸ばしたいと考えています。

4年生は、ゼミ活動の集大成ともなる卒業論文の執筆にとりかかります。児童労働問題、ディアスポラ、印中の経済力比較を分析する学生もいれば、自分の関心につけて、インドにおけるウイスキー消費やインド音楽の可能性について調べる学生もいます。個性的なテーマは、刺激的なだけではなく教員や他のゼミ生の引き出しも増やしてくれます。ゼミでの2年間は、個性的なスパイスたちが互いに個性を引き出しあいながら絶妙なマサラに調合されていく過程といえるのではないのでしょうか。まさにインド・ワールド。これがこのゼミの形になりそうです。

最先端科学で心臓病の病態解明と治療を目指す

専門は循環器内科。心筋梗塞・弁膜症・不整脈・心不全等の患者さんを最新技術で治療するとともに、これらの病態を分子レベルで解明します。大学院生23名。

ふくだけいいち
福田恵一
医学部教授

心臓は血液を静脈側から動脈側にくみ出すポンプとして機能している臓器です。私が医者になった28年ほど前にはポンプとしての心臓は理解されているものの、どうして心臓が病気になるのか、その原因を分子レベルで解明することは全くできておりませんでした。

しかし、最近の20年間の進歩は目覚ましく、原因不明とされた病気の多くが解明され、治療開始の糸口が見つかってまいりました。

私は子供の頃から科学者になるのが夢であり、医学部に入ってから病気の原因を究明したり、新しい治療法を作りだしたりすることを目標に生きてまいりました。

私が16年前に心臓の筋肉を再生し、心不全の患者さんの命を救いたいと思って始めた研究は、当時は全くの夢物語でした。骨髄の中の幹細胞を用いて心臓の筋肉の再生を始めましたが、その後、ヒトES細胞の開発、iPS細胞の発見を経て大きく臨床応用に向けて研究

が進められております。そして、この流れは今や世界的潮流に発展しております。その他にも、心臓弁膜症がどうして発症し進展していくのかという研究や、心臓の交感神経が心不全という病態の時に副交感神経に替わってしまう（分化転換する）という現象の発見は、世界の心臓病の医師・研究者をあつと言わせる研究に発展いたしました。

現在、私のこうした取り組みに共感した若者が数多く私の研究室に集まっており、医師、大学院生、国内外の留学生、研究助手、臨床研究コーディネーター等を含め、総勢80名近くになっています。こうした若い力を結集し、人材育成の場としての研究室を充実したものにするとともに、福澤先生の言うところの「実学」としてのサイヤンスを発展させ、世界を牽引する慶應医学を実現したいと願っております。

最前線で患者さんに役立つ研究を

せき ともひさ
関 倫久 医学研究科博士課程3年（執筆時）
※2011年3月、3年で修了。標準就学年数は4年。

私は初期臨床研修を終了後、循環器内科大学院生として福田恵一教授のご指導のもとで研究に取り組むなかで、iPS細胞の作製方法をより患者さんにとって低侵襲なものにできないかという着想から研究を行いました。微量の血液からiPS細胞を作製する方法を確立し『Cell Stem Cell』という科学誌に論文として発表し、日本学術振興会第1回育志賞を受賞させていただくことができました。研究室では行われていることひとつひとつが、臨床の最前線で患者さんの役に立つような成果を出すという目標に向かっていきます。高いレベル、高いモチベーションで研究の指導をしていただき、非常に恵まれた環境で研究できたことを幸せに思います。



やる気を生みだすライフスキルプログラム

～人の心に響く言葉や態度を試行錯誤する中で自分自身が成長する～
(2年生10人、3年生10人、4年生15人)

考えて行動する力 ライフスキル実践

おりかさ あい
折笠 愛 総合政策学部4年

私たちは「スポーツコーチング」「ライフスキル」の二つを軸に研究を行っています。

授業ではスポーツを通じた人づくりをテーマにグループディスカッションが多く実施されています。行政と連携したライフスキルプログラムの作成と実践や、アスリートを対象にしたコーチングなどのフィールドワークも盛んです。個々が明確な目的を持って参加しており、授業にはスポーツマンならではの活気があふれています。東海林先生の表裏のないご指導は学生たちから全面的な信頼を集めており、小さなことから大きなことまで相談できる安心感があります。試合応援など授業以外での繋がりが強いことも東海林研究会の魅力です。



どうかいりんゆうこ
東海林祐子
総合政策学部専任講師

人をやる気にさせる言葉や行動はどのようなものでしょうか？人はどのような状況でやる気になるのでしょうか？

私は長い間、スポーツの指導現場におりました。「勝つ」という目標に向けて、選手を観察し、選手の心理的なプロセスを考慮して、やる気にさせるコツを経験知として積み重ねてきました。失敗や挫折から生まれたものも多くあります。そうした経験知や着眼点を柱にして、現在は、オリンピックを目指すアスリートやコーチをはじめ、企業の方など指導的立場におられる方を対象にライフスキルプログラムを提供し、実践しています。ライフスキルとは「人生の中で生じる困難や障害に建設的かつ効果的に対処する力」を指しますが、スポーツ現場で培った経験知はライフスキルとして日常生活にも大きく影響していきます。例えば、スポーツ現場で挫折にぶつかったときの対処の仕方、チーム力

を高めるためのコミュニケーションの仕方、状況を打開する思考力など、こうしたものをライフスキルとして捉え、日常生活にも汎化できるようにしていきます。

研究会の学生は、目標を設定するツールを開発したり、コーチの言葉かけと選手の心理状態の調査から、選手がやる気になる言葉や局面を明らかにしたりしています。またスポーツに限らず、学校（先生と生徒、友人間、医療（医師と患者）、企業（上司と部下）などといった分野でも実践をしています。学生を観察していると、人のやる気を生みだす過程で、自分自身の指導力のなさを痛感し、自己改革をして自らの信念や哲学を再構築しているようです。こうして、他者のライフスキルを高めながら、同時に自分自身のライフスキルも高めることにつなげているようです。

まさに半学半教は、私たちの研究会が最も重視している教えであると感じています。